

## 防衛大学校本科第29期学生及び理工学研究科第22期学生 卒業式における学校長式辞（昭和60年3月17日）

防衛大学校本科第29期及び理工学研究科第22期の学生諸君は、本日をもって所定の教育訓練並びに研究の全課程を終了し、4年あるいは2年の小原台生活に別れを告げるようになりました。ここに、卒業式を挙行するに当たり、卒業生諸君に対し、まず心からお祝いを申し上げます。

本日のこの栄ある式典に、国务御多端の折にもかかわらず御臨席を賜りました中曾根内閣総理大臣<sup>注(1)</sup>、坂田衆議院議長<sup>注(2)</sup>、加藤防衛庁長官<sup>注(3)</sup>をはじめ、国会議員の諸先生ほか、内外多数の来賓各位に対し、心から

厚くお礼申し上げます。また卒業に至るまでの間、歴代の防衛関係機関の幹部各位、官民の諸機関、更には有志の皆様方、並びに在日米軍、各国大使館付武官の方々からいただきました御指導、御協力に対しましても併せて厚くお礼申し上げます次第であります。また、本校において学術教育の任に当たられました教授、助教授、講師、助手の各教官、日夜をわкатаずひたむきに訓練補導に全力を傾注され、あるいはまた縁の下の力持ちとなって各般の校務に精励せられた自衛官及び職員各位に対しましても、学校長として深甚なる感謝と敬意を表するものであります。更にはまた、遠路をも省みず御参列賜りました御父兄の皆様方に対しましても、今日までの御援助に深く感謝申し上げますとともに、ここに御子弟の成業を心からお祝い申し上げます次第であります。

396名の本科学学生諸君、省みれば昭和56年の春4月、肌寒い曇り空の下、中講堂で最初に迎えた時のことは、今も思い出を新たにすると



第4代学校長 土田 國保

---

注(1) 中曾根康弘

注(2) 坂田道太

注(3) 加藤紘一

ころであります。それからの4年間、私は諸君とともに過ごしてまいりました。諸君は学業に励み、訓練その他数多くの厳しい試練に耐え、逞ましい成長を遂げ、栄ある今日を迎えることが出来たのであります。シンガポール共和国、タイ王国の卒業生諸君にも心からなる祝福を贈るものであります。

さて諸君の在校中、防衛大学校の内部もいろいろな変化がありました。まず諸君は、学生隊編成替えのスタートとともに入校し、学年別中隊編成下の4年間の学生舎生活を経験した最初の卒業生であります。また年間を通して勉学のシーズンと諸行事・訓練のシーズンに区分しましたが、諸君はその最初の体験者でもあります。

規律に縛られ通すような生活環境、雰囲気、将来大をなすべき幹部を養成するには適当でなく、むしろ日常ゆとりのある自律的な生活を軸として、時には脱線することはあっても、その反省と自戒をお互いに深め合いつつ、自主的な生き方を練り上げていって貰いたい、また出来るだけ同期生同士のつながりを広く、そして深くもたせようという二つの目的をもったこの改革の下で、諸君は、先輩たちと比べて、かなり異なった日常生活を送って来ただけに、幹部候補生学校、更には将来においても、注目される存在となるであろうことは、諸君自らも認識しておく必要があると思います。そして、防大卒業のただ今の時点こそ、まさに大切なスタートであり、自衛隊幹部として、また一個の社会人としての磨きは、各自のこれからの自啓自発のいかんにかかっていることを改めて銘記していただきたいのであります。

在校中、私は諸君に時折、「防大生は愚直なれ」と説いてきました。申すまでもなく、その「愚直さ」とは、盆暗・単細胞たれという意味では毛頭ありません。複眼的な視野、思考能力をもつこと、狡知にだけた相手の企図を看破し、その乗ぜんとするところを制し、更には逆に己れのペースに引きこむことによって、自ら正しいと信ずる目的を達成することを可能とする底力、またアイロニーやウイット、ユーモアを解するのみならず、いかなる時もそれらを駆使出来るゆとり、それでいて、世のけがれの浸み通る余地のない確固たる基本姿勢、名利・栄達・金銭的な利害は二の次にして、内心の奥にこの尊い祖国日本防衛のために必要とあれば身の危険をも省みず、一身を犠牲にする覚悟を秘めているまさに愚直なる人生観を、この小原台で学んだ筈であります。それなるがゆえに、私は諸君を尊敬し、諸君一人一人に限りなき愛情を注ぎつつ、その大成を祈ってやみません。

次に、理工学研究科63名の卒業生諸君に対し、一言申し述べます。諸君は、幹部自衛官として必要な資質の涵養、なかんずくそれぞれの分野における高度の専門的知識技能を修得すべく、2年の歳月を本校において過ごされたのであります。思えばあと15年、世界は次の世紀の関頭に立つのであります。この21世紀初頭における自衛隊の幹部たるべき諸君に求められるニーズは何でありましょうか。それは、一つには全人的な教養であり、二つには国際人としての力量であり、そして三つには高度の科学技術力なのであります。諸君が、この小原台において大学時代の基礎の上に、それぞれの専攻を通して充電を図り、将来の飛躍と大成のポテンシャルを培う機会を得たことは真に有意義であり、2年間の第一線勤務の空白を補ってあまりあるものと信ずるのであります。今後諸君は、それぞれ新たな任務に挺身せられるのであります。更に研鑽に努められ、ますます重要となりつつある自衛隊の科学技術の発展向上に尽力されるよう切望してやみません。

小原台生活の幕は、今まさに閉じようとしつつあります。これから先、同期生同士、その融和と団結を更に強め、いかなる部署、そして、いかなる境涯にあっても、防大出身者としての誇りをもって、お互いに手を取り合い助け合いつつ、末永く祖国日本の輝かしい将来のために、それぞれ挺身してゆかれんことを、お別れに当たり、心から祈念しつつ、ここに式辞を終わるものであります。